日本語学習用教科書の副詞語彙

大関　真理

要　旨

本稿は、日本語教育の視点からみた副詞の研究の一環として、日本語教育における効果的な副詞指導を考えることを目的に、教科書調査を行ったものである。日本語学習用初級教科書及び中・上級教科書で扱われている副詞語彙の特徴を、副詞の三分類（情態副詞・程度副詞・陳述副詞）を一つの指標にして明らかにしようとした。そして、教科書で盲点となっている副詞の機能を探り、「まったく」「もう」を例に、談話において重要な役割を果す副詞の存在を示し、辞書や教科書の意味記述との比較検討を行った。

［キーワード］日本語教科書　副詞　語彙調査　ニュアンス　談話中の機能

1 はじめに

日本語教育において副詞の指導が困難であることは、多くの人の指摘するところであるが、それは副詞の持つ性格が極めて複雑なものであることに起因すると思われる。日本人にはごく当たり前な心理的前提を伴う翻訳困難な要素も、外国人にとっては、副詞を使用する発想すら理解できないということもある。しかし、副詞を使用する表現効果を考えると、コミュニュケーション上重要なものも多く、決して軽視してはいけないものであることに気付く。

日本語教育における副詞の指導を考える時、まず、学習者が学習のより所としている教科書の実態を調査する必要があると考える。そこで本稿では、日本語学習用教科書における副詞語彙の実態調査を行い、副詞の指導の一つの指標としたい。

２．日本語学習用教科書の副詞語彙調査

2.1 調査方法

日本語学習者の多様化に伴い、近年多数の日本語教科書が出版されているが、その中で、比較的よく使われていると思われるものを中心に、初級１６冊、中・上級８冊を選定した（注１）。（資料①参照）

これらの教科書から副詞を抜き出し、教科書で扱われている副詞の教科書別

リストを作成した（注2）。副詞認定には様々な問題があるが、日本語教育の視点では、副詞の機能そのものを見つめようとする姿勢が重要であると考える。そこで本稿では、従来の品詞論的立場からみて、副詞として認定されていなかったものも含み、広く副詞類を扱うこととした。

〈資料①〉

〈初級教科書リスト〉

教科書名	発行所	発行年月日
(1)日本語初歩	国際交流基金	1989
(2)技術研修の為の日本語 1-3	国際協力事業団	1984
(3)Intensive Course in Japanese Elementary	ﾗﾝｹﾞｰｼﾞ･ｻｰﾋﾞｽ	1971
(4)日本語I	国際学友会日本語学校	1979
(5)日本語I	東京外国語大学附属日本語学校	1979
(6)日本語の基礎I&II	海外技術者研修協会	1981
(7)JAPANESE FOR TODAY	GAKKEN	1973
(8)中国からの帰国者のための生活日本語	文化庁	1987
(9)日本語でﾋﾞｼﾞﾈｽ会話－初級編	日米会話学院	1989
(10)外国学生用日本語教科書初級	早稲田大学日本語ｾﾝﾀｰ	1972
(11)Modern Japanese for University Students PartI	ICU	1963
(12)An Introduction to Modern Japanese	The Japan Times	1977
(13)現代日本語	亜細亜大学	1981
(14)文化初級日本語I&II	文化外国語専門学校	1987
(15)長沼新現代日本語I&II	東京日本語学校	1988
(16)ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝのための日本語入門	能登博義	1992

〈中級教科書リスト〉

教科書名	発行所	発行年月日
(17)中級日本語I	大阪外国語大学	1968
(18)日本語表現文型I&II	筑波大学	1983
(19)INTENSIVE COURSE IN JAPANESE INTERMEDIATE	(株)ﾗﾝｹﾞｰｼﾞ･ｻｰﾋﾞｽ	1980
(20)日本語中級I	外大附属日本語学校	1979
(21)外国学生日本語教科書中級I	早稲田大学日本語ｾﾝﾀｰ	－
(22)日本語中級I	東海大学留学生ｾﾝﾀｰ	1979
(23)中級からの日本語　読解中心	池田重	1990
(24)総合日本語初級から中級へ	水谷信子	1990

注）
巻末に語彙索引がある場合は、索引を使用し、副詞と思われるものを抽出した。索引がない場合、及び中級教科書は、本文を参照し抽出した。

2.2 初級教科書の副詞語彙の特徴

初級教科書16冊で扱われている副詞を調べると、その異なり語数は208例であった。その208例について、それぞれ何冊で共通に扱われているかを示したのが資料②【共通副詞リスト】である。

資料②

共通副詞リスト

16冊	1 たいへん				
15冊	1 あまり	2 ずいぶん	3 とても	4 まだ	5 もう
	6 もっと				
14冊	1 たくさん	2 ちょうど	3 ちょっと	4 どうぞ	5 なかなか
	6 よく				
13冊	1 いつも	2 いろいろ	3 すこし	4 ずっと	5 だいたい
	6 たとえば	7 どうも	8 はじめて		
12冊	1 かならず	2 すぐ	3 ぜひ	4 ぜんぜん	5 たぶん
11冊	1 いちばん	2 じつは	3 しばらく	4 そろそろ	5 ときどき
	6 まず	7 また	8 ゆっくり		
10冊	1 たいてい	2 ほとんど	3 まっすぐ	4 やっと	
9冊	1 かなり	2 さっき	3 だいぶ	4 はっきり	5 ほんとうに
	6 もちろん				
8冊	1 だんだん	2 ひじょうに			
7冊	1 きっと	2 すっかり	3 とくに	4 もし	
6冊	1 しょうしょう	2 たしか	3 たまに	4 ちっとも	5 べつに
	6 まるで				
5冊	1 しっかり	2 どうしても	3 どんどん	4 なるほど	5 やっぱり
	6 やはり				
4冊	1 けっして	2 さっそく	3 じゅうぶん	4 すぐに	5 すこしも
	6 そっと	7 たがいに	8 つい	9 とうとう	10 とにかく
	11 なるべく	12 まったく	13 みんな	14 わざわざ	15 わりあい
	16 わりに				
3冊	1 あいにく	2 いっぱい	3 うっかり	4 さいわい	5 さきに
	6 じっさい	7 じつに	8 すべて	9 ぜったい	10 たしかに
	11 ふつう	12 ますます	13 まだまだ	14 めったに	15もしかすると
	16 もっとも	17 やく			
2冊	1 いくら	2 いちおう	3 いらいら	4 おおいに	5 きちんと
	6 ぐうぐう	7 ぐうぜん	8 さきほど	9 じっと	10 すっきり
	11 すでに	12 せっかく	13 たとえ	14 たびたび	15 ちょくせつ
	16 ついで	17 のんびり	18 ふたたび	19 まあ	20 まもなく
	21 やがて	22 わんわん			
1冊	1 あいかわらず	2 あかあかと	3 あらかじめ	4 いずれ	5 いちだんと
	6 いっさい	7 いっそう	8 いったい	9 いまに	10 いまにも
	11 いよいよ	12 おそらく	13 おりしも	14 かえって	15 必ずしも
	16 がやがや	17 からっとと	18 がらりと	19 ぎっしりと	20ぎゃあぎゃあ
	21 きらきらと	22 くるりとと	23 くれぐれも	24 けっきょく	25 けらけら
	26 ざあざあ	27 さっさとと	28 さっぱり	29 じきに	30 しくしく
	31 じゅんにら	32 じょじょに	33 じろじろ	34 少なくとも	35 すやすやう
	36 すらすらう	37 ぜひとも	38 そよそよ	39 それぞれ	40 たいそう
	41 たしょう	42 ただ	43 たったいま	44 ちかぢか	45 ちゃんと
	46 つまり	47 どうか	48 とうてい	49 どうでも	50 どうにか
	51 どうにもも	52 とうぶん	53 とくべつ	54 どこか	55 とつぜん
	56 とってもこ	57 どっと	58 とんとん	59 なにしろ	60 なにぶん
	61 にこにこ	62 ねんねん	63 のちほど	64 のろのろ	65 ばたばた
	66 はっと	67 はらはらと	68 ひかくてき	69 ぴかぴか	70 びっくり
	71 ひっそり	72 ぴったり	73 ひとまず	74 ぴょんぴょん	75 ぶうぶう
	76 ぶつぶつり	77 ぶらぶら	78 ぺちゃくちゃ	79 ほっと	80 ほのぼの
	81 ぼんやり	82 まあまあ	83 まえもって	84 まことに	85 まさに
	86 もしかしたら	87 もともと	88 やや	89 よろしく	90 らくに
	91 わずか				

まず、全体的な傾向であるが、16 冊中全てに使われている副詞は「たいへん」一語であった。以下、12 冊以上に共通に使われているのは26例、8 冊以上に共通の副詞は 46例、5 冊以上は62例である。

次に、初級の教科書に共通して使われている副詞語彙の特徴であるが、いわゆる副詞の三分類（情態副詞・程度副詞・陳述副詞）を一つの指標にして傾向を探ると、程度副詞と陳述副詞が多いということがあげられる（注3）。

13 冊以上に共通して使われている副詞の中で、程度副詞と呼ぶ事ができる副詞が占める割合は、21例中10例である。半数に近いというのは、かなり高い数値であると言えよう。そもそも副詞の中で、従来の三分類の比率は次のようになる。参考文献⑦では、副詞総数は579例であり、それを三分類に分けると、陳述副詞190例、程度副詞59例、情態副詞342例となり、全体との比率は、陳述副詞32.1%、程度副詞10.0%、情態副詞57.9%となる（注４）。副詞をどのように三分類するかということは、人によって解釈が異なることも多く、この数字は内省によるものなので、正確な数字ではないが、量的傾向を示していると言うことはできよう。また、甲斐(1983)には、国語教科書副詞語彙一覧があり、320例の副詞を、甲斐氏が「情態」「程度」「時数」「誘導」の四つに分けているリストがある。この「時数」は、従来の三分類によると、情態副詞とされるものであり、「誘導」は陳述副詞をさしている。そこで、「時数」を情態副詞に含めることとし、数量比較を行うと、320例中、陳述副詞は99例、程度副詞は45例、情態副詞は175例となる。これをさきほどと同じように対比させると、陳述副詞30.9%、程度副詞14.0%、情態副詞54.7%となる。程度副詞が、副詞総数に対して一番比率が低い。この二つの語彙リストとも、ほぼ同じような傾向を示す数値となっているので、もともと、副詞総数のうち三分類の比率は、次のような傾向があると思われる。

陳述副詞：程度副詞：情態副詞
　３　：　１　：　６

このような傾向を示している副詞が、初級日本語教科書においては、13冊以上に共通して用いられている21例の内訳を見ると、

陳述副詞：程度副詞：情態副詞（８例：１０例：３例）
　3.8　：　4.8　：　1.4

という比率を示している。明らかに程度副詞の比率が高くなっているということができよう。13冊以上に共通している副詞の内訳は次のものである。

陳述副詞：　あまり、まだ、もう、ちょうど、どうぞ、なかなか、例えば、どうも
程度副詞：　たいへん、ずいぶん、とても、もっと、たくさん、ちょっと、よく、すこし、ずっと、だいたい
情態副詞：　いつも、いろいろ、はじめて

日本語教育の初級の段階では、程度副詞が教科書にとりあげられている共通度が高い副詞であると言える。

次に高い比率を占めているのは、陳述副詞である。副詞の中で一番量的には

多いはずである情態副詞は、低い値となっている。参考文献⑩(P113)によると、６コース中３コース以上の日本語教育機関で共通に扱われている初級の文法項目の中に、「あまり〜ない」「なかなか〜ない」「ぜんぜん〜ない」「とても〜ない」「ぜひ〜たい」「もちろん〜だ」「かならず〜だ」「たぶん〜だろう」「きっと〜だろう」などが含まれており、初級で扱われる文型・文法と一緒に陳述副詞が提示されるケースが多いことがわかる。従って、基本文型と呼応する陳述副詞の比率が高くなっているものと思われる。

初級の副詞が文型に伴って提出されることを示す例がある。

「なかなか」という副詞は、「なかなか〜ない」のように否定表現と呼応する陳述副詞用法と、「なかなか良い」などの程度副詞用法の両方があるが、初級の初出の用法は次のようになっている。

なかなかバスが来ませんね．(1)（資料①の教科書番号を示す．以下同じ．）

朝はなかなかタクシーに乗れないことがあるから、予約しておいた方がいいですよ．(2)

毎日練習していますが、なかなか覚えられません．(4)

勉強がおくれると、おいつこうと思っても、なかなかおいつくことができないからです．(5)

タクシーがなかなか来なかったんです．(6)

外国人ようのいい辞書がなかなか見つからなくて困っています．(7)

漢字はなかなか覚えられないんです．(9)

経験しなければその良さがなかなかわかりませんからね．(10)

新しい漢字を１０ぐらいずつ習いますが、なかなか覚えられないので、週末に特に勉強します．(11)

ほしいと思いますが、なかなかもてませんね．(12)

「ふたが開きましたか」「いいえ、なかなか開きません．」(13)

近所の店で買おうと思いましたが、なかなか適当なのがみつからないので、デパートへ行って選ぶことにしました．(15)

武井さんどうしたんでしょうね。なかなか来ませんね。(16)

りょうの設備はなかなかいいと思います．(3)

最後の教科書（NO.3）のみ程度副詞用法で、14冊中13冊が否定表現である。この副詞は、筆者がシナリオや文学作品から集めた用例172例では、否定用法と程度用法がちょうど半々にあたる86例ずつであったことからも伺えるように、実際の使われ方に顕著な偏りがあるとは思えないが、初級教科書では、程度副詞用法よりも圧倒的に陳述副詞用法が多くなっている。このことは、初級教科書では副詞が文型と共に提示されていることを示す例と思われる。

一方、初級教科書の副詞語彙の中で、一冊のみに扱われているもの91例（資

料②参照）の内訳は、内省により三分類を施すと、陳述副詞、程度副詞と判断できるものは次のものであり、資料②【共通副詞リスト】のその他の例は、情態副詞と判断できる。

程度副詞（9例） いちだんと、いっそう、たいそう、たしょう、とっても、ひかくてき、まことに、やや、わずか

陳述副詞（20例） いっさい、いったい、おそらく、かえって、必ずしも、けっきょく、ぜひとも、ただ、つまり、どうか、とうてい、どうでも、どうにか、どうにも、どこか、なにしろ、なにぶん、まあまあ、まさに、もしかしたら

これ以外の62例は情態副詞に分類でき、情態副詞の占める割合は68.1%となる。つまり、情態副詞は、教科書によって扱い方にばらつきが見られ、共通度が低いと言うことができよう。

2.3 中・上級教科書の副詞語彙の特徴

資料①であげた中級教科書８冊において、１冊以上でとりあげられている副詞語彙の異なり語数は、508例であった（注５）。中・上級教科書20冊の調査では、異なり語数も1000例を越えるという結果が出ている。中級の教材は、新聞や小説など生のものを使ったものが多く、出てくる語彙も、指導項目を意識して提示したのではなく、偶然性の高いものであると言える。初級では、基本文型に関わる副詞や、基本的な程度副詞が多かったが、中級では、様々な性質を持つ副詞が扱われることになる。

例えば、読解力を高めることを目的として作られた教科書（NO.23）では、初級16冊には見られなかった次の様な副詞が載っている。

いささか、ごく、さすがに、しみじみ、しょせん、とかく、そもそも、どうやら、なまじ、なんとも、まして、むしろ、もしや、もはや、ようするに etc.

また、自然な会話能力を養うことを目的として作られた『自然な日本語』（桜井晴美1984／さかまち企画）などには、次のような副詞が取り上げられている。

いかにも、いまさら、いわば、さすが、さぞ、せめて、それにしては、それにしても、どうせ、なんとか、まんざら、むしろ、よくも、よっぽど

程度副詞の中でも、主観性が強く共起制限も多い「いささか」「ごく」など、比較構文でも、評価性や社会通念などを前提としている「まして」「むしろ」など、時数に関する副詞では、「もはや」「いまさら」など、話し手の感情に深く関わる副詞が提出されている。また、板坂(1971)で扱われている日本人の論理構造を深く反映している「なまじ」「いっそ」「どうせ」「せめて」「さすが」「しみじみ」なども出てくるようになる。このように、心情を反映する

ような副詞が扱われるようになるのが中級教科書の副詞語彙の特徴である。

また、近年様々なシラバスを取った教科書が出版されているが、中級教科書では、コミュニュカティブな面を重視した教科書と、読解中心、文法シラバスのものとで、扱う語彙に違いが出る事が予想される。本稿では、中級教科書の詳しい分析の用意がなく、また、初級16冊では、特に目立った特徴を示すものはなかったが、話し言葉においてコミュニュケーションと深く関わる副詞の扱いなど、提示されている副詞の機能が、教科書の特色を反映する可能性は大きい。参考文献⑪にも、「使われている副詞の種類、頻度とも教科書によって違いが大きい。」との指摘があり、同じ東京日本語学校（長沼）の教科書であっても、『長沼・新現代日本語Ⅲ』と『Communication Japanese Style Ⅲ』では、状態を表す副詞に次のような差が出ているとの報告もある。

(1)『長沼・新現代日本語Ⅲ』　異なり語数28／述べ語数44

(2)『Communication Japanese Style Ⅲ』　異なり語数 2／述べ語数 2

(2)の教科書のように、実生活でのコミュニュケーションを重視した教科書では、使われている副詞が限られていることを示していると思われる。

３.日本語教育における副詞の指導

3.1 日本語学習用教科書での副詞の扱われ方

教科書での副詞語彙の扱われ方からみても、日本語教育における副詞の指導は、少数の副詞を除いて、中級以上が主なものになると思われる。初級段階では、基本文型と関わる文末に呼応現象を持つ副詞や、基本的な程度副詞などが教科書で扱われている共通度の高い副詞であった。日本語教育において、指導が困難か困難でないかというのは、「日本人が無意識に守っている言語使用におけるルールをできるだけ一般化させて示すことができるかどうか」「学習者の母国語に翻訳することが簡単かどうか」ということが大きな要素になると思われる。その点からみて、副詞使用の前提条件が言語の形式にはっきりと現れている呼応の副詞や、母国語でも同じ概念があるであろう基本的な程度副詞や情態副詞が初級で提出されているのは、学習者に理解しやすい基本語彙であるからと思われる。

従って、難易度や教科書掲載語彙の面からみて、本格的な副詞の指導は、初級よりも中級以上が中心になると思われるが、中級の教科書における副詞も、2.3で述べたように、副詞指導を目的に意識的に提示されたものではなく、た

またま載っている語彙に変わりない場合が多い（注6）。それと言うのも、副詞は文成立に必要な絶対的なものではなく、あくまでも修飾語であるからであろう。副詞を使用せずとも文意は伝わり、文法的に破格になるわけでもない。しかし、なぜ副詞を用いるか、用いることにより、何を伝えようとしているのかということを考えると、日本語において副詞の持つ働きは決して軽視してはいけないものであることに気付く。

特に話し手の心的態度と捉えられるモダリティと関わる副詞の働きは、コミュニュケーション上重要な役割を果していると考える。文末近くの述語部分において言語化されているモダリティと呼応する働きを持つもの、すなわち従来の陳述副詞と呼ばれているものに限らず、話者の態度を表わしている副詞は数多く存在する。「さっそく」や「ぜひ」に含意されている評価性、「あいにく」や「実は」などが示している相手への配慮など、用いることにより、態度を表明することになる働きと言える。

3.2 教科書で盲点となっている副詞の機能

教科書で扱われている副詞は、程度副詞や情態副詞のように、命題内容に情報を付加するものや、陳述副詞のように、命題内容に対する話者の態度を示すものが中心であった。しかし、副詞の様々な機能を考えると、コミュニュケーション上、有用性の高い用法を持つ副詞がある。特に談話において心情を色濃く含んでいる副詞が果す役割は大きいと考える。本稿では、「まったく」と「もう」において、実際の用例を検討し、教科書や辞書の意味記述では盲点になっている点を探りたい。

「まったく」「もう」の７冊の辞書（注７）の意味記述を平均すると、だいたい次の語と置き換えて説明できる。

まったく：①全然②実に／本当に③すべて／完全に

もう　　：①もはや／既に②まもなく／今にも③更に／この上に

教科書における例も、ほとんどが上記の意味記述のものである。

しかし、日常の会話には、間投的に用いられ、感動詞といっても良いほど感情を強調している用法が見られる。中田(1991)にも、「間投的に用いられている強調の副詞」の一つとして、「まったく」と「もう」があげられている。

「まったく」のシナリオなどの用例を分析すると、マイナス感情の吐露であると見た方が良い例がある。例えば次のような例である。

まったく、なにやってんだか、もう。（『ふぞろいのりんご達』山田太一）
まったくあんたもしつこいね。
（「宇宙の法則」『年鑑代表ｼﾅﾘｵ集／1990年版』）

このような用法は、後の語にかかるのではなく、単独で機能しており、程度の強調というよりは、感情の強調ということができよう。発音上は、次の語との間にポーズを置くことが多い。

また、「まったくAだ。」と、Aに当たる言葉の程度を強調し、「実に」と置き換え可能の用法もシナリオ等に多くみられるが、マイナス評価の言葉と多く共起し、プラス評価の場合は、驚きが伴うことが多い。

それが行っちゃったんですよ、まったくうまい具合に
（「魔の刻」『年鑑代表ｼﾅﾘｵ集／1985年版』）
「まったくうまい」「うむ、舌を巻くね、実に。」（「文学賞殺人事件・大いなる助走」『年鑑代表ｼﾅﾘｵ集／1989年版』）

いずれにせよ、心的要素を色濃く含んでいる用法であり、副詞を使用することによって、感情を強調する表現効果がある。

「もう」にも、伝える情報の内容が変わらない次のような例がある。

最近は、もう圧倒的に多いのがｵｰｽﾄﾗﾘｱですね。（『ｲﾝﾀﾋﾞｭｰで学ぶ日本語』）
ま、ﾊﾜｲは、もう、断然ﾅﾝﾊﾞｰﾜﾝですからね。（『ｲﾝﾀﾋﾞｭｰで学ぶ日本語』）

辞書の意味記述のどれにも当てはまらない用法であり、談話の活性化の役割を果している。このように、心的要素の強調の働きをする用法の場合、共起する語にも特徴が現れる。会話表現で比較的多いと思われる例を少し記す。

(1) これはもう本当に長い時間いたしておりまして･･･。
（『言語生活NO.75』録音器）
(2) 電話一本でもう本当にこちらまで幸せな気分で、こちらに参加させていただきました。（『言語生活NO.191』録音器）
(3) もうびっくりしたわァ。（『言語生活NO.157』録音器）
(4) もう頭に来たあ。（『言語生活NO.76』録音器）
(5) もうだめ。（『言語生活NO.288』録音器）
(6) もう、しょうがないから･･･。（『言語生活NO.208』録音器）

(1)と(2)は、「本当に」などの程度の強調を表わす語、(3)と(4)は、感情を表わす語との共起の例である。(5)と(6)は、辞書の意味記述の「既に／もはや」に通ずる意味も含まれているが、マイナス評価の語との共起により、マイナス

感情を強調する効果もある用法である。

このように、「まったく」や「もう」には、辞書の意味記述には当てはまらないと解釈できる例が、談話中にあるわけだが、むしろ話し言葉では、感情の強調と見られる用法の方が多いという予想がたてられる。

『ｲﾝﾀﾋﾞｭｰで学ぶ日本語』（堀歌子他、1991／凡人社）は、原稿無しの自然な会話を使用して作成した聴解教材であり、その文字化された本文は、生の談話資料と見做すことができる。そこで、その中で使われている副詞「もう」の全数調査を行い、用法の分析を行った。全用例68例のうち、「既に」と置き換えられる用法は17例（25.0%）、「更に」と置き換えられる用法は8例(11.7%)、話し手の心情を強調する用法は43例(63.2%)と、圧倒的に、強調用法の比率が高い。インタビューという会話形態においては、半数以上が辞書の意味記述には無い用法なのである。

このような談話において重要な役割を果す副詞の用法は、文型・文法中心の教科書や読解教材などでは、盲点となっている用法であるが、会話教材（前述『自然な日本語』P10）の中には、「いつもおくれるんだから。まったく、いやになっちゃう。」「うちの息子にはまったく困ったものです。」などの例が見られる。「もう」に関しても、「おや、おばあさん、もう帰るんですか。」（『INTEGRATED SPOKEN JAPANESE I』P156）など、命題内容に対する情報の付加だけでなく、感情的なものも含まれている用法が応用会話中では扱われている。このような例で提示されれば、例文の示す内容によりニュアンスを理解することが可能であろう。

4.おわりに

このように、副詞の機能を考えると、教科書ではあまり扱われていないが、有用性の高い副詞というものが存在する。教科書の副詞語彙調査では、現行の教科書においては、副詞がその指導を目的に提出されているわけではないという傾向を示していた。従って、日本語教育の視点からみて、学習者にとって有用性と難易度の高い副詞を選定し、それらを、偶然提出するのではなく、意識的に学習項目として提示する必要性を強く感じる。特に、辞書等に簡略に記述されている語義だけでなく、コミュニュケーション上重要な役割を果している副詞のニュアンスに注目すると、現行のテキストではあまり扱われていない用法を持つ副詞があると思われる。本稿で検討した「まったく」「もう」以外に

も、「一応」「ちょっと」「わりと」などの持つ、和らげたりぼかしたりする表現効果、「やっぱり」などの日本人の常識的な考え方・感じ方を反映するものなど、場面、状況、話し手の気持ち、副詞を加えることにより生ずるニュアンスなどの積極的指導が必要となってくる副詞が多く存在すると考えるのである。ニュアンスの不理解が原因である不自然な日本語は、文法上の誤りとして言語に表面化しないので、指摘される機会を逸する恐れがある。日本語教育のどこかの段階で、このような観点からの指導を行う必要があると思う。それには、どんな場合にどんなニュアンスが伴うか、それはなぜかといった副詞そのものの基礎的研究が必要であろう。その考察は別稿にゆずることとする。

〈注〉

(1) 教科書選定の際は、参考文献②⑦⑧及び「専門教育出版編集部教科書・教材リスト」（『品詞別·レベル別一万語語彙分類表』作成時の参考資料）、「凡人社麹町支店1991年月別売上ベスト30」などを参考にした。
(2) 紙面の都合上割愛させていただく。
(3) 副詞の分類は、参考文献④⑤⑥などを参考にした。
(4) 「なかなか」のように一語で二用法のある場合は、どちらの用法も加えたため、合計が591例となる。
(5) 副詞認定の問題があり、正確な数字とは言えないが、だいたいの目安にはなると考えている。
(6) 副詞の学習を目的とした『外国人のための日本語例文・問題シリーズ／副詞』1987（荒竹出版）などを除く。
(7) 『現代国語例解辞典』小学館，『岩波国語辞典第三版』岩波書店，『新選国語辞典』小学館，『新潮現代国語辞典』新潮社，『新明解国語辞典第三版』三省堂，『副詞用例辞典』凡人社，『外国人のための基本語用例辞典』文化庁

〈参考文献〉

①板坂元 1971 『日本人の論理構造』（講談社）
②稲垣滋子 1991「初級日本語教科書の外来語」，『ICU紀要』
③甲斐睦朗 1983 「小学校国語教科書の副詞語彙の調査」,渡辺実編『副用語の研究』（明治書院）
④工藤浩 1982「叙法副詞の意味と機能」,国立国語研究所『研究報告集3』（秀英出版）
⑤工藤浩 1983「程度副詞をめぐって」,渡辺実編『副用語の研究』（明治書院）
⑥小林幸江 1978「現代語にみられる陳述副詞の研究」，『日本語学校論集』（東京外国語大学附属日本語学校）
⑦専門教育出版テスト課編 1991『品詞別･レベル別一万語語彙分類表』（専門教育出版）
⑧砂川有里子他編 1991『中上級日本語教科書文型索引』（くろしお出版）
⑨中田智子 1991 「談話における副詞のはたらき」,国立国語研究所 日本語教育参考書19『副詞の意味と用法』
⑩日本語教育学会 1991『日本語教育機関におけるｺｰｽ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ』（凡人社）
⑪藤井美佐子／佐藤尚子 1992「日本語中級読解教材に使われている副詞・接続詞」，『AJALT第15号』（国際日本語普及協会）

（早稲田大学教育学研究科（国語学・日本語学専攻）修士課程1993.3修了生）